

# Walking-Stick 考

神 部 晴 子\*

## A Study on the Walking - Stick

Haruko Kambe

要 旨 現在では歩行用の補助として使われているステッキは、20世紀初頭までは男性の大切なアクセサリーの一つであった。歴史の上では、王や支配者が持つステッキと呼ばれたが、アクセサリーとして流行するのは、17世紀頃からである。

剣 (sword) と同時にステッキを持つことが紳士としての重要な装いの一つであった17世紀から18世紀初頭には、先端に金や象牙、トルコ石などを付けた大変高価なものが愛用された。18世紀初頭に、帯剣が禁止された結果、ステッキの普及、流行が際立ってくる。装飾品としてだけではなく、剣の代用品としてステッキが持たれたからである。また一時期、医師が疫病除けとして持ち歩いたり、男性だけでなく女性にも携えられた。

19世紀は最もステッキが多様化した時代であり、ステッキを見れば、その人の精神がわかると言ったのはバルザックである。そして、20世紀初頭には、ある雑誌で、ステッキはファッションの恩人とまで評された。ステッキには、男性が本能的に持つ一種の決闘意識が内在してきたと考えられるが、ファッションとしても重要な役割をもってきたのである。

### はじめに

ファッションプレートを見る時、男性が小粋なステッキを手にしている姿が目にとまる。文献によると、それは特に、17、18世紀に流行が始まっている<sup>1)</sup>。そして、男性間では今世紀に至るまで、しばしば、服装の大事なアクセサリーの一つとして用いられている。一体、装いとしてのステッキには、どんな意味が隠されているのであろうか。

日本語のステッキは、英語のスティック (stick 杖) から転じた語で、正しくは、ウォーキング・スティック (walking-stick) である。本稿では、英語読みに統一し、以降 walking-stick と表記する。walking-stick は、しばしば ケーン (cane) と呼ばれることもある。cane とは、「籐製のステッキ、軽い細身のステッキ」のことで<sup>2)</sup>、walking-stick としても使用されたことからそう呼ばれる。walking-stick は、仏語では、カンヌ

\* 本学助手 服装史学

(cane)。語源を辿ると、13世紀、ラテン語の cana (葦、管) に遡る<sup>3)</sup>。

walking-stick と呼ばれる以前は、stick、staff という言葉があった。それは、支配者であることや身分の高いことを示す印であったが、walking-stick とは別のものである。しかし、一般に概説書では walking-stick の前身として考えられている。本稿では、それらを walking-stick 前史として取り扱った。

### 第1章 walking-stick 前史

フォン・ベーンは、著書『装飾品』(Ornaments)<sup>4)</sup>の中で、また、レスターとオアークは共著『衣服の装飾品』(Accessories of Dress)<sup>5)</sup>の中で、walking-stick の歴史について以下のようにとらえている。すなわち、古代エジプトでは、高身分の人達によって保持されていたとされる装飾された持ち手 (把手) のあるものや、先端に袋などを吊り下げるための木釘が付いた長さ 3 ~ 6 フィート (約 90cm ~ 183cm) の stick

が多く発見されている。また、ツタンカーメン王の墓の発掘品の中にも数多くの杖 (stick) が発見されており、その中には非常に珍しい製作品として、それぞれの持ち手に動物の姿が、一方は黒檀、もう一方は象牙で浮き彫りにされていたものがあった。この他、金製のものなども見つかった<sup>6)</sup>。このように、彼らは象徴的な杖 (staff) を携えることによって支配者であることを表現した。古代ギリシアでも、同様に、杖は高貴の象徴であった。これは、ギリシア神話の中に杖を持った神が幾つか描かれていることによっても明らかである。神話の中では、笏と鷲とともに見られるゼウス、三又の槍を携えるポセイドン、先端に輪、あるいは2匹の蛇のついた杖を持つヘルメスといった神々が表現されている<sup>7)</sup>。中世では、聖職者が棒 (staff) を携えており、それはまさしく、身分や力の象徴であった。この他、審判者や役人も官職の象徴として棒を携える一方、巡礼者や牧師、農夫は日常の備品として杖 (stickあるいはstaff) を携えたことも触れている<sup>8)</sup>。

11世紀には、フランスの女性の一部にwalking-stickが現れた。それらはリンゴの木で制作され、先端は装飾されていた。そして、15世紀末期になると、シャルル7世の寵妃であり、ファッションにも非常に敏感であったアニエス・ソレルがwalking-stickを取り入れたとされる<sup>9)</sup>。しかしながら、女性間では、それは間もなく姿を消すが、18世紀末期に再び姿を見せることとなる。

このように、ベーン、およびレスターらはその歴史について、古代から触れている。しかし、語義上では区別していると思われる。なぜなら、両者においてstickとstaffの語は使い分けられているからである。

元来、stickとは杖、いわゆるステッキの意味であり、staffとは武器または支えとしての杖、棒、棍棒の意味である。つまり、初期の頃はwalking-stickという語は用いず、それを頻繁に使うようになるのは15世紀末期頃からである。このことはベーンでも同様である。

彼らによると、walking-stickの記録としては、イギリスでは、ヘンリー8世が数多くのwalking-stickを所有していた最初であるという。これによると、絹で覆われ、金で装飾されたものが6本、銀メッキで装飾されたにぎりの中に天文時計の入ったもの、取っ手 (持ち手) の中に道具箱を持つもの、この他、上端に香水ビンを入れたもの、そして、日時計、毛抜き、コンパス、メジャー、ナイフ、金や銀の試金石のついたものなどがあった。こうして彼は、相当のstick 収集家であったことがわかる。しかし、この頃はまだ、上層の間でしか用いられなかった<sup>10)</sup>。

一方、フランスでは、イギリスよりもやや遅れてアンリ4世がstickを最初に所有した人物であった<sup>11)</sup>。

このように、文献では、イギリスがやや早いものの、ほぼ同じく16世紀中頃、またはそれ以降にwalking-stickの最初の記録がみられる。そして、O.E.D.<sup>12)</sup>によると、walking-stickの語は、1580年に登場する。

## 第2章 17世紀から18世紀にみる walking-stick

### (1) walking-stick と剣

17世紀における男性の装飾品は、walking-stickと剣 (sword) であったトリベイロが述べているように<sup>13)</sup>、walking-stickは17世紀を通して剣とともに携えられていた。剣は、もともと左の腰に吊り下げられていたためであろうか、walking-stickは通常、右手で握っていた。そうすることにより、当時の紳士の服装は完璧なものとなったと言われる<sup>14)</sup>。

イギリスでは、17世紀初頭、チャールズ1世の時代に、先端に金や象牙のついたものが持たれるようになる。チャールズ自身も立派なwalking-stickを数多く所有していたと言われる<sup>15)</sup> (図1参照)。そして、この1630年代は、数多くの肖像画の中に、walking-stickを見ることが出来る。他方、同じ頃のフランスでは、ルイ13世が象牙製の持ち手のついた長い黒檀の

stickを持っていたと言う<sup>16)</sup>。

チャールズ2世(1660-85)の代になると、持ち手の所にリボンやふさ飾りの付いたwalking-stickが見られるようになる。また、この時代のstickについては、その日記で知られるS・ピープス(Samuel Pepys 1633-1703)によっても記録されている。この日記は、17世紀イギリスにおいても貴重な資料とされ、頻繁に引用される。彼は、1664年4月8日の項に次のように記している。

「岸に上がるとすぐに、雨とあられのどえらい嵐がやってきた。それでステッキ屋に入り、散歩用のものを一本買った。値は4シリング6ペンス。つぎ目一つだけのものだ。」<sup>17)</sup>

そして、1666年7月20日には、  
「彼は、ニス塗りの杖を進呈してくれた。大変立派なもので、持ち歩くにも軽い。」<sup>18)</sup>  
と記している。

一方フランスでは、イギリスと同様、この世紀の中頃、絹の紐やふさ飾りで持ち手が装飾されたstickが持たれている<sup>19)</sup>(図2参照)。長さは、歩く時に都合のいい長さで、大体、2フィート10インチから3フィート(約86cmから91cm)で制作されていた。



図1 「チャールズ1世」, ダニエル・マイテン作, 1631年, ロンドン, ナショナル・ポートレート・ギャラリー所蔵

ルイ14世(1643-1715)は、stickの熱烈な擁護者であった。その証拠に彼は、stickを持たずして公けの場に姿を現すことはほとんどなかった<sup>20)</sup>。そして、彼はとりわけ、高価に装飾されたstickを好んだ<sup>21)</sup>(図3参照)。フランスでは、ルイの治世になってwalking-stickが男性ファッションの不可欠の装飾品になったことは、レスターも指摘するとおり<sup>22)</sup>、それは、非常に高価なもので作られていたことにもよる。象牙や黒檀などを使い、持ち手には、琥珀、ルビー、トルコ石、ダイヤモンドなどがあしらわれた(図4参照)。

18世紀になると、walking-stickは男性にとってそれまで以上に重要な装飾品となっていく。その要因の一つに、パースにおける帯剣の禁止がある。18世紀パースの賑わいを生み出したことで知られるリチャード・ナッシュ(1674-1761, 別名ポー・ナッシュ)は、街中で剣を携帯することを禁止した。それは、1727年頃と考えられている。禁止するに至った直接のきっかけは、剣による悲惨な事故を目のあたりにしたことによるものと言われている<sup>23)</sup>。18世紀後期になってもその禁止令は続き、やがて定着していく。この帯剣の禁止は、ロンドンでも受け入



図2 「1690年代フランスのstick」, A. トルーヴァン作, 1694年

れられ、1720年から30年にかけて、上流紳士までもが朝の散歩に剣を持ち歩かなくなった<sup>24)</sup>。帯剣の習慣は純粹に護身用だけでなく、紳士の身分を表す社会的な意味を持っていたから、この禁止はやはり一つの大きな改革だったと蛭川も述べているように<sup>25)</sup>、このことはstickの高揚に少なからず影響を与えたと考えられるのである。リベイロも、ポー・ナッシュの行為がcaneを普及させる要因の一つであることを主張している<sup>26)</sup>。その他、軍事力の増大によって、どんな軍人でも剣を手にすることが出来るようになり、もはや剣は騎士のエリート性を示すアクセサリーではなくなった<sup>27)</sup>ということも考えられる。メルシエも次のように述べている。「ステッキが剣の代わりに用いられるようになったので、剣はもはや併用されなくなった。朝、人々はしなやかな細身のステッキを手を急ぐ。おかげで歩みは軽快になったし、それに60年前にはあれほど日常茶飯事であり、単なる不注意がもとで流血の結果を招いた喧嘩、口論をする者はもはやいない。法律というよりも、風俗がこの大変化をもたらしたのである。」<sup>28)</sup>このように、walking-stickは剣の代用品とし



図3 『ルイ14世とstick』、アンリ・テストリン作、1667年、ヴェルサイユ宮殿蔵

て持たれるようになったのである。しかし、ファッションとしての役割も持っていた。フランスでは18世紀末期、紳士達がwalking-stickに無謀にお金を費やし、独創的なデザインのものには極度の課税がなされたといわれている<sup>29)</sup>。お洒落にはあまり関心のなかったヴォルテールでさえ80本のstickを収集し、また自らの服装の簡素さを誇っていたルソーも40本以上は持っていたと言われている<sup>30)</sup>。

## (2) 医師用のwalking-stick

18世紀初頭、stickは伝染病を防ぐという理由から、特に、医師が持ち歩いた<sup>31)</sup>。病気を抑えるための殺菌剤として当時、酢が利用された。医師はそれの一杯入ったボールが先端に付いたstickを持ち歩いた<sup>32)</sup>。その様子は、1736年のホガスによって描かれた「葬儀組合」という作品の中に見ることが出来る(図5参照)。ここでは、stickの先を鼻に付けた医者姿が見られる。stickを鼻に持ってくることは、その時代の同業者の間の親しさを表したとも言われ、特に、評判の良くない職業、例えば葬儀屋などの間でみられた<sup>33)</sup>。

また、悪臭がひどかった当時の街で、防臭のためにポマンダー (pomander) と呼ばれる、

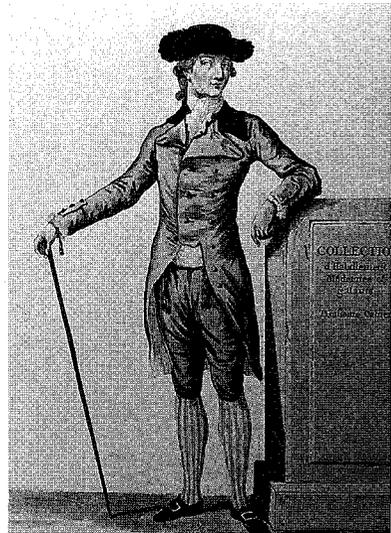


図4 『1770年代のstick』デレ作、1776年

中に香りの玉が入った細かい穴の開いた金属製の小箱が取り付けられたstickも用いられ、さらに健康に留意した人達によっても疫病除けとして持ち歩かれた。

### (3) walking-stickを携えた女性達

この世紀のもう一つの特徴で、stickの歴史においても忘れてならないのが、特に1780年代の女性達によっても携えられたことであり、その姿は残されたコスチューム・プレートの中にも見ることが出来る(図6参照)。メルシエは、1782年に次のように記している。

「女性も11世紀に携帯していたステッキをふたたび使用するようになった。ステッキを手に外出し、ひとりで街路を、環状並木道を行く。それは彼女らにとっては、無駄な飾りではない。」<sup>34)</sup>

そして、持ち手の部分には化粧用鏡や香水ビン、またオルゴールや小さなヴァイオリンが隠されているものがあつた。なぜ、特にこの時代の女性間で取り入れられたのであろうか。再びメルシエは

「歩くこともできなくなるほど高くなったおかしなハイヒールをはくために、男以上にステッキが必要になったのだ。」<sup>35)</sup>

と。

事実、この頃女性の靴のかかとは一段と高さを増した。その様子をモンタギュー嬢は次のように記している。

「まあ、なんと未婚の女性がこの通りの周辺でよたよた歩いたり、股を広げて歩いたり、そりかえて歩いたり、威張って歩いたり、両手を腰に当てて肘を引っ張ったり、前後に揺れたりしているのを見た。」<sup>36)</sup>

このように、高いヒール靴をはくことによって歩行に多少なりとも支障をきたしている様子が汲み取れる。ベーンも、「女性にとってそれは単なる装身具ではなく、むしろ男性よりも必要であつた」<sup>37)</sup>と述べているように、女性にとってのstickは装飾性よりもむしろ実用性が高かつた。比較的寸法の長いものが多く見られるのもそういった理由からであつたのだろう。そして、1770年以来パリでは当時流行していた憂愁症の治療として、医師が女性に運動のひとつとして歩行を推奨していた<sup>38)</sup>ということもあつた。

他方、その頃女性服における男性服の影響を見ることが出来、特にそれは1780年代において強かつた。例えば、男性コートのように大きな



図5 『stickを持った医師たち』, ホガース作, 1736年, ブリティッシュ・ミュージアム所蔵



図6 『stickを持った女性』, 1778年

ボタンの付いたグレートコートが女性の間で着用されている<sup>39)</sup>。このことから、stickは男性モードの流行の一つとして女性達によって取り入れられたとも推察出来る。

### 第3章 walking-stick流行の最盛期 —19世紀から20世紀初期—

19世紀は最もwalking-stickが流行し、多様化した時代である。シルクハット、コート、そしてステッキという姿は、当時の男性の典型的スタイルであった(図7参照)。バルザックも、次のように述べている。「ステッキの握り方ひとつにその人の精神が現われるのだ。」(「風俗のパトロジー」)<sup>40)</sup> これほどまでにwalking-stickは、重きを成すものであった。また、当時紳士の間ではそれを持たずに外出することは不作法であるとさえ考えられ、ダンディーと言われる男性は様々な状況に応じた幾つかのstickを所有していた。1894年には、フランスの新聞で22種類ものwalking-stickについて触れている<sup>41)</sup>。例えば、カメラの三脚、化粧台、画家用のイーゼル(掛け台)、足のせ台、手提げランプ、椅子、キャンドルスティックとして

活用できるもの、そして持ち手にナイフ、フォーク、スプーン、ハンマー、ペン、インク、ピストル、タバコケース、外科医療用機器、マッチ箱、双眼鏡、カメラ、ライター等を備えたものもみられた。

stickの製造業者は様々な種類を創案し、stickであること以上に多くの機能を持ち合わせたものでなければならなかった。当時、パリで製造されたstickは評判が高く、数千人がその製法をパリで勉強したとまで言われる<sup>42)</sup>。モンテスキュー伯爵<sup>43)</sup>は、stickの立派なコレクションを持っていた。F・ジュリアンによると、彼のstickは大きな磁器の壺に入っていて、主人の散歩を力づけ、主人の身振りにめりはりを与える光栄に浴するのを待っていたのである<sup>44)</sup>。全体が象牙でできたものの他、トルコ石や七宝の孔雀で装飾されたもの、さらに握りの部分が根付けで出来ているものまであった。彼はゴンクール売り立てで、握りが黄金製のうねトルコ石がはめこまれたルイ15世のものだったといわれる籐で出来たstickを購入した。1897年の官展に出品されたボルディーニによるポトレートの中で彼が手にしていたのがまさにこのstickであった(図8参照)。彼のstickを手にし

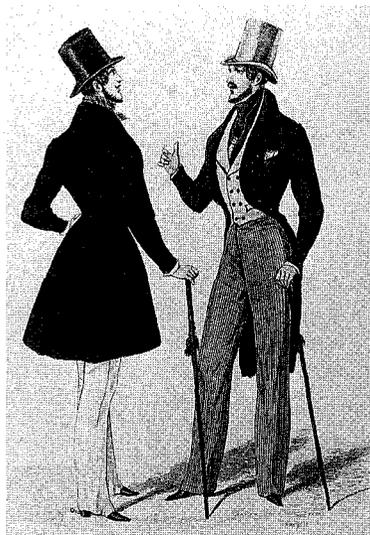


図7 『1830年代のダンディー』, 1836年



図8 『ロベール・ド・モンテスキュー伯爵』, ボルディーニ作, 1897年, オルセー美術館所蔵

た肖像画はこの他にも数多く残されている。

20世紀に入っても、walking-stickの様々なスタイルを生みだしながら、紳士のエレガントなアクセサリーの一つとして用いられている。1926年の「メンズウエア」誌の中で、ある記者はステッキをファッションの恩人と評している。そして、

「その理由は明らかである。ステッキを携行しようとした男性は、自動的にバターを塗ったような古びた帽子、かかとがすり減った靴、問題になりそうなスーツやオーバーコート、汚れきった破れそうな手袋、あるいは5セント、10セント均一店で人気のある洋品類といったものを着用するのはやめようと思意する。」<sup>45)</sup>

とある。ところが、30年代に入るとこうした人気は徐々に衰えの兆しをみせ始めた。そのことを裏付けるかのように、1945年の「エスカイア」誌のファッション部によると、ステッキの復活という見出しとともに特集を設けている。ここでは、「男性の服装では自己表現が出来る部分は幾つかに限定されているが、それをステッキで示すことが出来る。」と説明している<sup>46)</sup>。すなわち、walking-stickは男性の精神性も示したと考えられる。

このように、ステッキは1930年代に入り次第に使われなくなるが、一部の男性間ではその後も持ち続けられ、完全に消え去ることはなかったものの1940年代にはあまり見られなくなってくる。

#### 第4章 考 察

以上見てきたように、walking-stickは、歴史上では幅広くとらえられているが、ファッションとしての最初の記録は16世紀中頃であり、流行し始めるのは17世紀以降である。プーシェも指摘しているように<sup>47)</sup>、特に17世紀は、stickと剣が紳士としての重要な装いの一つとなった。決闘が日常行なわれていた時代において、剣は、生活の一部でもあり、紳士としての伝統

的な象徴の一部でもあった<sup>48)</sup>。しかし、18世紀初頭の帯剣の禁止令がwalking-stickを流行させる要因の一つとなった。すなわち、stickはアクセサリーとしてだけでなく、剣の代用品としての役割も持つこととなった。

歴史的に見ても、18世紀は啓蒙と理性の時代と呼ばれるように、貴族階級の特権である決闘に対する意識も次第に変わっていったと考えられる。つまり、決闘はより洗練化され、美化されるようになった<sup>49)</sup>。山田勝もブルジョワ階級ならびにブルジョワ思想の台頭が決闘そのものを崇高化、儀式化、神秘化させたことは否定出来ないとしている<sup>50)</sup>。

19世紀になるとwalking-stickは、流行の最盛期を迎えた。バルザックやモンテスキュー伯爵などwalking-stickの歴史上、非常に興味深い人物も登場する。そして、19世紀男子服について述べる時忘れてならないのはダンディズムである。その発生の背景には、ブルジョワの台頭、そして貴族の衰退が大きく関わっている。ボードレルの言葉を借りれば、「それは殊に、民主制がまだ全能になるに至らず、貴族性の動揺と失墜もまだ部分的でしかないような過渡期に現われる。こうした時代の混乱の中であって、自分の階級からはみ出し、嫌気がさし、することもない人々、それでいていずれも生来の力を豊かにもった人々が一種の新しい貴族性を打ち建てようとする計画を抱くことがあり得る。」<sup>51)</sup> そのような状況の中でダンディー達は服装によって貴族性を保とうとした。しかも、彼らにとって装飾品は特に重要であったと考えられる。なぜなら、ダンディズムは19世紀において風俗と趣味の指導権を握ったいくつかの価値の中のひとつに属するものであり、立居振舞い、衣服、そして個人の外観を特徴づけるすべてのものに異例の重要性を割り当てることにあるからである<sup>52)</sup>。すなわち、お洒落による決闘こそ、まさに風俗上のダンディズムにおける絶対的な価値ではなからうか。

一方、山田勝は次のように述べている。

「決闘は中世に始まり、様々な変貌を遂げながらその完熟期を迎えた。決闘は野蛮であり、殺人行為と非難されながらも上流階級ノブレス・オブリジェとして生き続けた。そしてその様式の完成が産業革命のブルジョワと民主主義の台頭と大きな関わりを持っていた現在のように完全な平等が常識になっていたわけでもなく、また貴族と貴族趣味への憧憬が根強く残っていた時代でもあった。この過渡期において、貴族性を望む者は、その生活様式によって新興成金には真似の出来ないライフスタイルを採用することになった。権力でない権力、無言の威圧力、空無の儀式性といったものが、この時代ではまだ支配力を持っていたわけである。決闘も一部から非難されてはいたものの、大衆から賛美と好奇の目で見られていた、それでもやはり、決闘は生命をかけたものであることに変わりはない。貴族のオブジェとはいえ、できれば避けたいのが人情であろう。その意味で別の様式、つまり生命に別状のない決闘も生まれたことは自然である。お洒落による決闘もそのひとつであろう。」<sup>53)</sup>

また、簡素化された男子服と装飾的効果を持つstickの調和も重要であったと推察する<sup>54)</sup>。

その後、1930年代の終わり頃まで流行は続くが、徐々に姿を消すこととなる。服飾史においても、1930年頃というのは男性の衣装が大きく変化した時期であり、少なくとも、その影響からまぬがれなかったとは言い難い。すなわち、その変化はいわゆる単純化の傾向へと向かったのである。その背景には、スポーツウエアの普及、さらに30年代におけるアメリカの大躍進による影響も隠しきれない。それは、装飾品においても同様であったと思われ、1935年には、それまで外出時に欠かすことの出来なかった帽子が着用されなくなったのである<sup>55)</sup>。そのような中であって、walking-stickも必然的にその影響を受けたと考えることも出来る。一方、ベーンも次のように言っている。「新聞と昼食のサンドウィッチ以外何も入ってもいなくてもアタ

ッシェケースを持つということが上流階級の紳士にとっての義務であると感じていた時は、stickは幾分後方に追いやられたこともあった。しかし、彼らは同時に2つのものを持つほど器用ではなかったのである。」<sup>56)</sup> また、パイアドらは、自動車の普及がstickを衰退させたひとつの要因でもあると述べている<sup>57)</sup>。以上が、現在までのwalking-stickについての歴史とその流行及び背景である。walking-stickにはファッションとしてだけでなく男性が本能的に持つと考えられる一種の決闘意識が内在していたといえよう。walking-stickを持つということが、貴族性すなわち精神的なエリート意識を強めたとするならば、それは、まさしく帯剣が意味してきたものと同じであった。考察を進めていく過程で、最近また新たな文献に出会った。今後、それらの資料を加え、研究を継続して行きたい。最後に、本稿の執筆に当たり、適切な御指導と御校閲を賜った石山彰名誉教授に感謝する。

#### 註

- 1) Yarwood,Doreen. The Encyclopaedia of World Costume,Lond.,1978,p.64  
Cunnington,C,Willet & Phillis. A Dictionary of Costume, Lond., 1960, p.64
- 2) 新英和辞典, 1980年, 第5版, 研究社
- 3) Bloch, O. et Wartburg, W.von. Dictionnaire Étymologique de la Langue Française, Paris, 1968
- 4) Boehn, Max von. Ornaments, N.Y., 1929
- 5) Lester, Katherine Morris & Oerke, Bess Viola. Accessories of Dress,1954
- 6) Lester,K.M. & Oeake, B.V., ibid., pp. 388-389
- 7) Lester, K.M. & Oeake, B.V., ibid., p.389
- 8) Lester, K.M. & Oeake, B.V., ibid., p.390
- 9) Lester, K.M. & Oeake, B.V., ibid., pp. 391-392
- 10) Boehn, M. v. op. cit., pp. 106-107,  
Lester, K.M. & Oeake, B.V., op.cit., p.392
- 11) Lester, K.M. & Oeake, B.V., op.cit., p. 392
- 12) The Oxford English Dictionary, 1989
- 13) Ribeiro, Aileen. Drees in eighteenth century Europe 1715-1789, Lond., 1984, p.32
- 14) Boucher, François. Histoire du Costume, Paris,

- 1965, p. 270
- 15) Lester, K.M. & Oeake, B.V., op. cit., p. 393
- 16) Boehn, M.v.op.cit., p.107, Wilcox, R.Turner. The Dictionary of Costume, Lond., 1969, p. 56
- 17) R.C.Latham & W.Matthews edited. The Diary of Samuel Pepys, Lond., 1995, Vol., p.117
- 18) R.C.Latham & W.Matthews, ibid., Vol., p.211
- 19) Lester, K.M. & Oeake, B.V., op. cit., p.393
- 20) Lester, K.M. & Oeake, B.V., op.cit., p.393
- 21) Binder, Pearls. The Peacocks Tail, Lond., 1958, p.188
- 22) Lester, K.M. & Oeake, B.V., op.cit., p.392
- 23) 蛭川久康, 『パースの肖像』, 研究社出版, 1990年, p.65
- 24) 蛭川久康, 前掲著, pp.66-67
- 25) 蛭川久康, 前掲著, p.65
- 26) Ribeiro, A., ibid., p.119
- 27) 山田勝, 前掲著, p.29
- 28) Louis Sébastien Mercier. Tableau de Paris, Edition établie sous la deirection de Jean Claude Bonnet, Paris, 1994, Tome I, pp. 235-236
- 29) Lester, K.M. & Oeake, B.V., op.cit., p.397
- 30) Doner, Jane. Fashion, Lond., 1974, p.56
- 31) Ribeiro, A., op.cit., p.32
- 32) リチャード・B・シュウォーツ, 玉井東助, 江藤秀一訳, 『十八世紀ロンドンの日常生活』, 研究者出版, 1990年, p.189
- 33) Byrde, Penelope. Male Image, Lond., 1979, p.215
- 34) Mercier, L.S.op.cit., Tome I, pp.235-236
- 35) Mercier, L.S.op.cit., Tome I, pp.235-236
- 36) Montagu, Elizabeth. Mrs. M.queen of the Blues : Her letters and friendships from 1763 to 1800, vol.2, Lond., p.82
- 37) Boehn, M.v.op.cit., p.115
- 38) Boehn, M.v.op.cit., p.115
- 39) Ribeiro, A., op.cit., p.155
- 40) バルザック, 山田登世子訳, 『風俗のパトロロジー』, 新評社, 1987年, 第6刷, p.30  
また, 1836年, ド・ジラルタン夫人が「バルザック氏のステッキ」という作品を記している。
- 41) Boehn, M.v.op.cit., p.118
- 42) Faveton, Pierre. Les Cannes, Paris, p.10
- 43) ロベール・ド・モンテスキュー (1855-1921)。ダンディーとしての最後の人物であると言われる。
- 44) フィリップ・ジュリアン, 『1900年のプリンス』, 国書刊行会, 1987年, p.259
- 45) Esquire's Encyclopedia of 20th. Century Men's Fashion, U.S.A., 1973, P.396
- 46) Esquire's Encyclopedia of 20th. Century Men's Fashion, ibid., P.398
- 47) Boucher, F.op.cit., p.207
- 48) 山田勝, 『決闘の文化史』, 北星堂, 1992年, pp.35-36
- 49) 山田勝, 前掲著, p.71
- 50) 山田勝, 前掲著, p.136
- 51) 福永武彦編集, 『ボードレール全集VI』, 矢内原伊作訳, 人文書院, 1981年, p.322
- 52) 生田耕作, 『ダンディズム』, 奢瀾都館, 1987年, pp.216-217
- 53) 山田勝, 前掲著, pp.230-231
- 54) ビンダーもその重要性について, 著書の中で触れている。Binder, P., op.cit., p.190
- 55) プリュノ・デュ・ロゼル, 『20世紀モード史』, 平凡社, 1995年, pp.278-279
- 56) Boehn, M.v.op.cit., p.117
- 57) Byrde, P., op.cit., p.214

## 図版出典

- 図1 Ormond, Richard. National Portrait Gallery in colour, Lond., 1979, Plate 90
- 図2 石山彰編, ファッション・プレート全集, 文化出版局, 1989年, 第4刷, 第1巻, No.16
- 図3 Diana de Marly. Louis XIV & Versailles, Lond., 1987
- 図4 石山彰編, ファッション・プレート全集, 文化出版局, 1989年, 第4刷, 第1巻, No.28
- 図5 Burke, Joseph & Caldwell, Colin. Hogarth, France, 1968, p.168
- 図6 Schéfer, Gaston. Documents pour l'histoire du costume, de Louis XIV, Paris, 1911
- 図7 石山彰編, ファッション・プレート全集, 文化出版局, 1989年, 第4刷, 第2巻, No.50
- 図8 Carlo L. Rogghianti. Boldini, Milano, 1970W